

学習者の自己評価と相互評価による 学力向上を目指した音楽科授業計画（2）

三村 真弓 吉富 功修 増井知世子 原 寛暁

I 本研究の課題と視点

音楽科の授業は、教材を中心として構想されることが非常に多い。特に表現活動においては、いかにその教材を解釈し、豊かに表現を工夫するかに目標が置かれることが通常である。この教材解釈も、学習者自身が行うことは少ない。教師による教材の説明もしくはヒントや暗示によって曲を何となく理解し、表現するのである。こうして1つの曲を仕上げ、次の曲の学習に入ると、また1から同じことを繰り返して行く。なぜなら、学習者は教材をただ表現するだけで、教材の奥に潜んでいる学習内容をしっかりと把握できていないため、学習の転移が起きにくいのである。こういった授業をずっと積み重ねていっても、当然音楽の学力は向上しない。

しかし、これらのことは周知の事実ではない。音楽科授業は楽しくなければならぬ、音楽をひたすら体験し、感動や達成感を味わうことこそが音楽科の目標である、と確信している音楽科教師は実に多いのである。もちろん、感動や達成感なくしては音楽科の授業は成立しない。しかし、音楽科も教科の1つである。音楽科の学力が厳然として存在する以上、学力を向上させるための学習目標や学習内容が毎時間の授業のなかできちんと設定され、確実に到達・習得されなければならない。

そこで、本研究者たちは、音楽科の学力向上を目指した音楽科授業の構築をめざし、昨年度から研究を行ってきた。本研究の視点は2つある。第1の視点は、自己評価と相互評価である。自己評価カードの項目によって学習者に学習内容を確実に認識させ、5段階評価によって自身の学習成果を的確に把握させる。これらによって、学習者は学習の目標をもつことができ、学習への意欲を高めることができる。さらに相互評価カードは、自己評価の妥当性を客観的に判断させると同時に、他者の価値観による自身の価値観の変容をもたらすし、新たな表現の工夫を可能にすることができる。

第2の視点は、学力構造を、認知的行動（わかる）、情意的行動（感じる）、精神運動的行動（できる）の3側面からとらえ、3者をバランスよく、しかも学習目標や内容をヒエラルキーにそって低次元から高次元まで系統的に設定することを意図し、授業構成を行うことである。この3側面およびヒエラルキーは、アメリカの音楽教育学者であるT. A. レゲルススキの理論¹⁾をもととしている。

本研究では、中学校2年生と高等学校Ⅱ年生を対象とした授業を計画し、自己評価カードと相互評価カードを用いて、学習内容の定着と学習意欲の向上を図った。
(三村 真弓)

II 中学校2年生を対象とした授業計画の概要と授業の実際

本章では、本年度の研究大会で行った授業のうち、中学校2年生を対象とした授業について記述する。

1. 授業計画の概要

(1) 単元、単元の目標、教材

単元 リコーダーとギターによるアンサンブルの工夫
単元の目標

- 1) アンサンブルに必要な知識と技術を身につけることができる。
- 2) 音楽的着想の交流を通して、音楽表現の多様性に気づくことができる。

教材 「コンドルは飛んでいく」(D. A. ロブレス・J. ミルチベルグ作曲)

(2) 学習計画 (11時間)

- 第1次：「コンドルは飛んでいく」のリコーダーとギターの全体練習 (2時間)
- 第2次：グループやパートの決定、楽譜通りのアンサンブル練習 (3時間)
- 第3次：表現の工夫と中間発表 (3時間)
- 第4次：工夫点の再検討と仕上げ、発表 (3時間)

表1 単元の学習計画

次	時	学習内容	備考	評価表
第1次	第1時	「コンドルは飛んでいく」のソプラノ・アルトリコーダーの運指や、のギターコード（G, B7, Em, C）を理解し、楽曲全体を演奏することができるようになる。	どの生徒もソプラノリコーダー、アルトリコーダー、ギターパートを演奏できるようにする。	
	第2時	ギターの B7 に変わる箇所をスムーズに演奏することができるようになる。	ギターコードでむずかしい箇所。	
第2次	第1時	グループでの楽器分担や練習を、協力して行い、同じパートの友達と合わせて演奏することができる。	男女混合の7～8人班。	
	第2時 第3時	テンポを一定に保ってアンサンブルをすることができる。	メトロノーム使用后、メトロノームなしでもテンポを一定に保つよう練習。	
第3次	第1時	前奏部分の工夫についてグループで考える。楽曲全体のアンサンブルを行う。	工夫のヒントとして、民族音楽の鑑賞や指導者による実演を行う。	ワークシート①
	第2時	楽曲全体の工夫について各自で考え、グループでまとめる。工夫点を取り入れながら、グループでアンサンブルをする。	各自の担当楽器で必ず1つ工夫点を考える。	ワークシート②
	第3時	中間発表を行い、アンサンブルの完成度や工夫点について相互評価を行う。	<工夫点の知覚>	評価表① 評価表②
第4次	第1時 第2時	相互評価を踏まえて、アンサンブルや工夫を練り直す。		評価表③
	第3時	アンサンブルをぴったり合わせることができる。各グループの表現の工夫について具体的に記述することができる。	本発表。 <工夫点の理解>	評価表④

2. 指導にあたっての工夫点

本単元の指導にあたって工夫した点は次の4点である。

第1点は、表現の工夫の具体的提示である。中学2年生の段階で、表現の工夫に関する着想が初めから活発に生まれてくるとは考えにくいので、学習計画第3次の初めに、表現の工夫例を、指導者の方でいくつか考えて実演する形で提示した。具体的には、リコーダーパートに装飾音をつけたり、ギターの伴奏型を変えたり、曲に前奏や後奏をつけることなどである。

第2点は、ワークシートの活用である。個人の着想

を言葉や楽譜で書き留めるためのものと、それらを集約してグループで1つにまとめるためのワークシートを考えた。

第3点は、グループ相互間で着想を交流し、自分たちのアンサンブルを練り上げるために、学習計画に中間発表の時間を設けたことである。

第4点は、本研究の主眼でもあるが、自己・相互評価表の活用である。生徒たちが毎時間の学習目標を明確にして学習を進めていくことができるように、ほぼ毎回、自己・相互評価表を作成し、個人やグループ内、時にはグループ間での評価を行うようにした。音楽科

の目標を、認知的領域、情意的領域、精神運動的領域の3つの領域で考え、評価表の項目に必ずこれら3領域の具体的項目を入れることにより、指導者が生徒たちの学習成果だけでなく、学習過程をより細かく把握できるようにした。

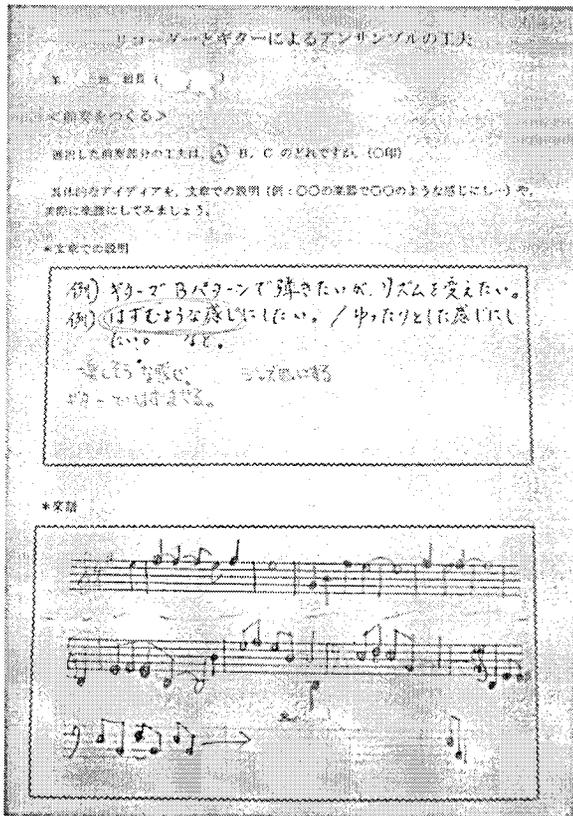
3. 授業の実際

第1次や第2次でのリコーダーとギターとの基礎練習の段階でも自己・相互評価表を活用したが、ここでは第3次第1時、第3次第2時、第3次第3時、第4次第1時、第4次第3時の授業について、評価表やワークシートを提示しながら説明する。

(1) 第3次第1時

グループごとのアンサンブルの工夫の第1時では主

資料1 第3次第1時のワークシート①



として前奏を考え、第2時では主旋律の部分（もともと課題として与えられている楽譜部分）の工夫を考えさせた。前奏のヒントとして、ボリビアの民族音楽の演奏場面を視聴させ、ケーナによるレチタチーヴォ風の前奏を提示した。（これをワークシート①ではAとした。）別の形態の前奏として、いわゆる合唱のピアノ伴奏に見られるような一定のリズムの反復を示した。（これをワークシート①ではBとした。）グループで前奏をA、Bどちらのパターンにするか決定させた。

(2) 第3次第2時

主旋律の部分について、各自が考えた工夫をグループでまとめた。

資料2 第3次第2時のワークシート②



(3) 第3次第3時

中間発表の際の自己評価表（表1、評価表①）と、グループ間の相互評価表（表2、評価表②）である。この時間には評価表①ではグループ内の相互評価を、評価表②ではグループ間の相互評価を行った。

評価表①の下線部が、「あらわでない音楽行動」²⁾のどれに対応するかについては、次のとおりである。（「表現の工夫に気づく」…認知1：知覚する、「表現を楽しむ」…情意4：楽しむ、「まちがえずに演奏する」…精神運動6：洗練する、7：一連の手がかりと

行為を調和させる、8：スピードを獲得する、「アンサンブルが合っていた」…精神運動6、7、8、10：完成する）

評価表②は、各自4枚分用意し、自分のグループ以外の評価を行った。（「工夫しているかしていないかに気づく」…認知1：知覚する）

この評価表は、次時（第4次第1時）にグループ内で回覧し、表現の工夫の練り上げに向けてフィードバックさせた。

表1 第3次第3時の自己評価表 (評価表①)

		自己評価表				
評価の尺度		5	4	3	2	1
		とても そう思う		全くそう 思わない		
わかる	他のグループの <u>表現の工夫</u> に気づくことができた。	5	4	3	2	1
感じる	他のグループのいろいろな <u>表現を楽しむ</u> ことができた。	5	4	3	2	1
できる	発表時、自分のパートを <u>まちがえずに演奏</u> することができた。(自己評価)	5	4	3	2	1
	発表時、自分たちのグループの演奏は、 <u>アンサンブルが合っていた</u> と思う。(グループ内の相互評価)	5	4	3	2	1

表2 第3次第3時の相互評価表 (評価表②)

() 班の演奏について 記入者 ()

評価の尺度 5 4 3 2 1

とてもよく 全く工夫
工夫している していない

ソプラノリコーダー	5	4	3	2	1
アルトリコーダー	5	4	3	2	1
ギター	5	4	3	2	1

*一口コメント (良かったと思う点, こうすればよいのでは? というアドバイ
スなど)

(4) 第4次第1時

表3 第4次第1次の自己評価表 (評価表③)

		自己評価表				
評価の尺度		5	4	3	2	1
		とても そう思う		全くそう 思わない		
前時の相互評価表を読んで、自分たちのグループの演奏について、記入されていた内容や改善点として取り入れよう と思うことを書きましょう。						
・良いところ			・改善点			
前時の相互評価表の内容を基にして、 <u>工夫をより深める</u> ことができた。		5	4	3	2	1
自分たちの <u>表現したいイメージ</u> がまとまってきたように感じる。		5	4	3	2	1
グループの <u>アンサンブル</u> が合ってきたと思う。		5	4	3	2	1

前時の中間発表を受けての表現の練り直しである。生徒たちは評価表②を回覧しながら熱心にその内容を読んでいた。

〔工夫をより深める〕…認知9：評価・判断する，10：苦心して仕上げる，11：決定する，「表現したいイメージがまとまってきた」…情意6：主観的に創造したり組織する，「アンサンブルが合ってきた」…精神運動10：完成する）

(5) 第4次第3時

本発表での相互評価表は，中間発表時よりも具体的に，工夫している点について記述できるようにした。そうすることによって，中間発表時に表現の工夫を「知覚」した段階から，「理解」や「分析」の段階へとあrawana音楽行動のレベルが上がることを意図した。取り組みのまとめを書く欄も設けた。

表4 第4次第3時の自己・相互評価表 (評価表④)

自己評価表			
各班の演奏を聴いて，工夫していると思った点について，できるだけ具体的に書いてください。			
工夫していると思ったところ			
班		班	
班		班	
この取り組みで学んだことは何ですか。			
アンサンブルを合わせるときに気をつけたことは何ですか			
今回の取り組みで，むずかしかった点は何ですか			
自分たちのアンサンブルの自己評価			
・工夫を深めることができたか	5	4	3 2 1
・ぴったり合わせることができたか	5	4	3 2 1

4. 学習のまとめとしての，生徒による記述

学習のまとめとして，上記評価表④の下線部について，生徒に記述させた。以下にその内容を示す。

(a) この取り組みで学んだことは何ですか。

- ・アンサンブルの難しさ
- ・編曲すること
- ・チームワーク。工夫をすればいろんな曲に変わる
- ・リコーダーとギターで合わせて弾くことや，リズムやテンポを変えることで，表現の範囲が広がること
- ・たった8人でも，合わせるのはすごく難しいということ
- ・他の人と同じことを合わせてするのは難しいということ
- ・みんなでやることを理解して，協力してできるようにするのがとても難しいということ
- ・リズムの工夫

- ・同じ曲でも演奏の工夫によって違う風合いが出る
- ・ギター
- ・自分が表現したいことを提案し，協力してもらったりすること
- ・工夫を深めれば良い演奏ができること
- ・音楽の楽しさ
- ・アンサンブルは難しいけど，自分たちの音楽を自由に作れること
- ・音楽のすばらしさ，みんなで合わせることの大切さ
- ・リコーダー
- ・同じ曲でも，それぞれの班で工夫のしかたが違ったこと。音楽の感じ方は人それぞれだと思った
- ・もう少し早く行動しよう

同じ内容や似た表現のものは省略したが，協力の大切さやアンサンブルのむずかしさ，表現の工夫の多様

さに気づいたという内容の記述が多かった。

(b) アンサンブルを合わせるときに、気をつけたことは何ですか。

- ・周りの音をよく聴くこと
- ・テンポを合わせること
- ・テンポに気をつけることと、あまり難しいフレーズを作らないようにしたことと、笑わないようにすること
- ・リコーダー同士でザッツを出して、出だしを合わせたところ
- ・始まりの一番最初の音を聞こえるようにすること（ギター）
- ・アイコンタクトで合わせるように努力すること
- ・他の人の指を見て自分も合わせること
- ・パートごとの合わせをしっかりと
- ・音の出始めをそろえること
- ・途中テンポを変えるときに継ぎ目を自然な感じにしようとした
- ・リズムを合わせるために、ギターの音を聴くようにした
- ・足でテンポを取ったり、ザッツを出したりした
- ・できるだけ正確に音を出し、タイの所は音を切らないようにすること
- ・人を気遣うこと
- ・協力すること
- ・みんなの音がまとまって1つのメロディーを奏でること
- ・前奏の後の始まり方
- ・工夫するところを忘れないようにする
- ・みんなの意見を尊重すること
- ・ピッチを合わせること
- ・ギターのリズムを忘れないようにすること

テンポや曲の出だしを合わせるという記述が多かったのは、指導過程で、それらのことを強調したことも大きく影響している。

(c) 今回の取り組みでむずかしかった点は何ですか。

- ・工夫を考慮すること
- ・ギターが合わない点、リコーダーが笑ってしまうこと
- ・みんなで合わせて演奏すること
- ・テンポが走り、だんだんずれていくことと、何を工夫すればいいのかわからなかったこと
- ・前奏をどうするか考えたこと
- ・みんなのアイデアをまとめて実行すること
- ・思ったより話し合いが進まず大変だった
- ・前奏をギターにまかされたところ
- ・ギターでの指の動き
- ・すべて
- ・男子とのコミュニケーション
- ・基本の音を展開するのを自分たちで考えないといけなかったこと
- ・他の楽器と合わせること
- ・リズムに変化をもたせたり、自分たちで前奏を作る点
- ・最後にテンポをゆっくりにするところ

- ・リコーダーのリズムがむずかしかった
- ・演奏を終わらせるタイミング
- ・工夫するところを考えると、1人ひとりの意見が違って、まとめるのがむずかしかった
- ・2回目の速さについていくこと
- ・協力すること
- ・8人の息がぴったり合うこと
- ・最後の最後で「こうしろ」と言われて、直さないといけなかった点

テンポを合わせることと、グループの協力、またグループのリーダーは意見をまとめるのに苦労したようである。

5. 考 察

表5（巻末）は、本単元の授業で活用した自己・相互評価表の3領域別の項目が、「あらわでない音楽行動」のどれに対応するかを示すものである。

表5の3領域別の評価表の項目は「あらわでない音楽行動」のヒエラルキーと対応している。このように、単元を通して学習目標をしだいに高次なものにしていくことによって、生徒に学習内容を確実に獲得させることができたと感じている。特に今回の取り組みでは、中2という段階も考慮して、評価表だけでなく、指導者による実演やワークシートも、学習成果に効果をもたらしたと考えられる。（増井知世子）

Ⅲ 高校Ⅱ年生を対象とした授業計画の概要と授業の実際

本章では本年度の研究大会で行った、高校Ⅱ年音楽選択生を対象とした授業について記述する。

1. 授業計画の概要

(1) 単元、単元の目標、教材

単元：ヴォイス・アンサンブルの取り組み

単元の目標

- 1) アンサンブルを行うための基礎的な技術と方策を、身につけることができる。
- 2) 自分のグループ独自の表現を工夫することができる。
- 3) グループで協力して、効果的に練習を組み立て実践することができる。

教材：作詞・作曲 L. クレアトール

H. E. ペレッティ G. D. ワイス

編曲 草薙 藍

「Can't help falling in love」

(2) 単元設定の理由

音楽科学習指導要領の高等学校第2学年における歌唱表現活動の4つの指導の柱は「声域の拡張と曲種に応じた豊かな発声」「視唱力の充実」「歌詞及び曲想の理解と個性豊かな表現」「重唱・合唱における豊かな表現」とある。1年間の授業での様々な活動を通して、歌唱におけるこれらの力を育成することは、最終的には「生涯にわたって芸術を愛好する態度」を養うという目標に繋がっていくものと考えられる。

言うまでもなく、「声」は人間にとって最も身近な楽器であるといえる。しかも、「ことば」を伴うことができ、技術の修練と表現の工夫によって、多様な表現力を得ることができる。

本クラスの生徒は、歌唱・器楽に関わらず熱心に活動することができているが、以前は歌唱と器楽を「別なもの」として捉える傾向も見受けられた。例えば、本校では授業でオーケストラ活動をしているが、生徒から「楽器は好きだが、歌はどうも…」といった声、またはその正反対の声も聞かれたことも事実であった。授業の構成全体では、そのどちらかに過度に偏ることのないように常々気をつけていたが、1時間の授業の中でこれら2領域を融合して取り扱うことは、実際は物理的に極めて難しいといえる。

そこで、今回は小グループによるヴォイスアンサンブルの取り組みを行った。小グループにしたねらいは、以下の3点である。

- ①相互交流と評価の活性化
- ②グループ同士の相互評価が可能
- ③1人ひとりの存在感が増し主体性の育成が期待できること

歌でも器楽でも、アンサンブルは1人では決してできない音楽活動である。人対人の横のつながりが生まれることによって、演奏の魅力は指数関数的に広がり、豊かになる。反面、個人が集団に隠れてしまうと成立しないという点で、少人数のアンサンブルは逆に大人数のそれよりも難しいとされる。

生徒たちには比較的難易度の高い課題解決を求めているが、この取り組みを通して自己表現をより豊かに工夫させ、アンサンブルの魅力をもっと身近に感じさせたい。そして、最終的にアンサンブルの本質は表現手段に左右されないことを少しでも実感できれば、今後の様々な音楽活動に自然と繋がっていくはずである。

(3) 学習計画 (10時間)

- 第1次……教材の試聴, 全体練習 (2時間)
- 第2次……各パート音取り, グループ編成 (2時間)
- 第3次……グループ練習と中間発表, 調整 (5時間)

第4次……最終調整, 発表・相互評価

(1時間)

2. 指導にあたっての工夫点

本単元の指導にあたって、授業の中で実際に工夫・留意した点は、以下の4点である。

第1点 発達段階の違いを考慮した指導方法の設定

前章で挙げた器楽アンサンブルの取り組みも、歌唱と器楽という領域の違いはあるものの、小集団によるアンサンブル活動を通して、音楽表現の工夫を深めることは共通目標であった。しかしながら、中学2年生段階では、授業者がある程度生徒の活動の手がかりを用意してやる事がどうしても必要であったのに対し、高校Ⅱ年生では、その面においてどれだけ生徒自らが工夫の段階を経ることができるのか、その上で授業者の必要となる部分はどこなのか、がポイントになる。生徒の活動の実態を見定めながら、授業者は必要最低限の支援に止め、指導方法を設定していくという方式を採った。

第2点 中間発表での演奏交流と工夫の深まり

グループ相互で中間発表を鑑賞し合い、互いに刺激し合うことによって、その後の活動の深まり(工夫と演奏水準の両面において)に繋がっていくことを期待した。また、繋げていくための授業者の適切な助言のあり方を探った。

第3点 指導計画を通して生徒たちのアンサンブル力、またアンサンブルにおいて大切なことをいかに学んだか

本指導計画の主たる目標であるが、アンサンブルというものを創りより良く高めていこうとする時、生徒たちは様々な苦労から多くのことを学び取ったはずである。それは何なのか。またその学びが、その他の全体合唱や器楽の取り組みに共通して繋がっていくのであれば、意味がない。

今回は、楽器を一切使わずヴォイスアンサンブルに絞った最大の理由は、器楽に比して個々の技術水準がアンサンブルに致命的な打撃を与える事が考えにくいこと、という点であった。純粹に、アンサンブルの向上と表現の工夫に向けて、全員の意識が揃い易いのは、という仮定である。その反面、アンサンブルの向上は、単純な編成ゆえに難しいであろうことが予測された。

3. 授業の実際

第1次では、まず高度なヴォイスアンサンブルというものがどんなものをイメージするために、教材曲楽譜を配布し、該当曲を含め数タイプの楽曲を視聴した。

- ①「ハモネプ全国大会CD（音声のみ）」から
バカ安（グループ名）「宇宙戦艦ヤマト」
- ②「キングス・シンガース リサイタル」（映像付）
からザ・ビートルズ「Help！」
- ③「Can't help falling in love」範唱CD（音声のみ）

この時、授業者は「3曲ともタイプは違うが、軽々と演奏しているように聴こえただろう。だが、実際やってみれば、彼らがどれだけ難しく凄い事をやっているかが、また声がうまく合わさった時の爽快感が、良く分かるはずだ。」と、活動に対する動機付けのための指導を加えた。

その後、全体での歌詞読み、各パート毎の歌詞のリズム読みと進み、各パートに分かれての音取り作業に入った。

3時間程かけて（第2次まで）、各パート練習と全体合唱練習を交互に行い、個々の生徒がある程度自分のパートを把握できたところで、全体を男女混合の5つのグループ（A～E）に分け、小グループ活動に入った。

ここで、授業者は「5つのグループとも同じ曲をやるけれども、5つともコピーしたように同じような演奏になったのでは全然面白くない。ここからは、君たち自身の作業である。テンポの変化・英語の歌詞の扱い・声の出し方・バランス、微妙なニュアンス、などを工夫すること。少しは身体表現が入っても良い。とにかく、自分のグループにしかないオリジナリティを、グループで協力して練習する中で創り上げて行ってほしい。」と、本取り組みの根幹になる部分を指導した。

そうして、各グループの自主的な練習過程に入っていったのだが、ここからは、生徒の様子を観察しながら、2人の授業者が適宜グループを巡回しながら指導を加えていった。生徒たちは（多少戸惑いながらも）、総じて男女の壁を越えて意欲的に取り組みを始めた。複数では自信を持って歌えていたのに、小グループに分かれた途端に声が小さくなった生徒が、当然のように出てきた。グループの中で譜読みのできる生徒が指導する場面も見られ、足りない部分は授業者がフォローする形をとった。

その後、教育実習後期の授業が入り、その授業の中で、「Can't help falling in love」の英歌詞を訳して読

み深める作業を全体で行った。こうして、生徒たちはより深くこの楽曲のイメージを理解することができたように思う。

この段階では、いずれのグループも未だ工夫段階には入れず、自分のパートの音を確認しながら場面場面のハーモニーをつかむ事、リズムや強弱の移り変わりを理解すること、場面場面で自分のパートは主役なのか伴奏なのか判断することなどの点をしっかり押さえる作業が主であった。

第3次では、未完成の段階ながらそれぞれの途中経過を発表・鑑賞し合った。ワークシートとして、「グループ練習の振り返り」をさせ、どのような練習過程で、どのような点に重点をおいて練習したか確認させた。この段階では、工夫による各グループの音楽表現の差異はさほど見られなかったものの、メンバーの違いからくる演奏の個性は十分に見られた。

あるグループのテノール担当が、見事なソロ能力を發揮したので、この点を大いに評価し「自分に主役が回ってきた時は、彼のように憶さず堂々と表現することが大切である。」と、指導した。

また他のグループでは、いずれのパートも均等にバランスよく発声することで、良いハーモニーが生まれていたことに着目させ、「他のパートとのかかわりを常に意識することも大切である。」と指導した。

第4次に入り、それぞれがつかんだ課題を元に、少しずつ表現の工夫が見られるようになり、まさに五位五色の工夫が見られ始めた。

- ①テンポを微妙に変化させるグループ
- ②手拍子や身体表現を混ぜるグループ
- ③ソロをしっかりと生かし、主旋律の移り変わりを意識したグループ
- ④歌詞のニュアンスを大切に表現するグループ
- ⑤強弱や音のアーティキュレーションを意識したグループ

授業者は、それぞれの特徴を肯定評価しながら、アンサンブルとして弱い点を意識させ、巡回しながらアドヴァイスを行った。

これまでの経過を見て感じたことは、まずある程度確固たるアンサンブルができる水準になって初めて、それぞれの表現の工夫が見られ始めるということである。

最終調整ののち、研究大会の授業発表として最終発表を行った。発声そのものを指導する場面が少なかったため、サウンドのブレンドまでは到底及ばなかったものの、やや音程に不安の残る生徒も含めて、全員が堂々と発表できていた姿が印象的であった。

これまでの取り組みの経過を振り返り、自己評価と

感想を生徒に記述させた。主なものを次に記す。

〈自己評価〉	* 5段階評価	～クラス平均値*
①アンサンブルの中で、自分の表現力・技術が高まった。	……	4.00ポイント
②グループのメンバーと協力して、練習ができた。	……	4.56ポイント
③合わせる難しさの中にも、楽しさを発見できた。	……	4.69ポイント
④練習の成果を生かして、堂々と発表できた。	……	4.18ポイント
⑤他グループの発表を聴いて、参考点を見つけた。	……	4.56ポイント

〈苦労したこと・学んだこと〉

- ・思ったよりずっと難しかったが、楽しかった。
- ・男女を問わず協力できたので、1回1回の練習が充実していた。
- ・アンサンブルは、まず自分がしっかりと表現しつつ、他の人もちゃんと意識しなければうまくいかないことが、よく分かった。
- ・同じ曲でも、グループによってそれぞれ違う表現ができることに、驚いた。
- ・人前で緊張感をコントロールして歌うことは、難しい。今回は少し後悔が残ったが、次は頑張りたい。
- ・1人ひとりが上手ければ、アンサンブルもうまくいくと思っていたが、必ずしもそうとは限らないことが分かった。協力して“調和”をつくることが、一番大切だと思った。
- ・自分達だけでここまで色々細かく表現にこだわって練習したことはなかったので、とても楽しかった。
- ・これからの器楽の合奏などにも生かしていきたい。

生徒たちの反省のまとめからいえることは、「協力してアンサンブルを創り上げることの楽しさ」や、「グループ相互の鑑賞から刺激を受け、参考点を見つける」などの点が、より自己評価が高かった。それに対して、自分たちの演奏そのものには、やや厳しい評価を下している。もう少し、表現の工夫の段階に時間をとってやるべきであったかもしれない。しかし、生徒たちはこの取り組みを通して、アンサンブルの難しさや魅力など大切な要素を、自らつかんでくれたようである。
(原 寛暁)

Ⅳ 終わりに

授業の中で、学習者が主体的に活動することは非常に重要なことである。ただし、主体的活動には目的意識がきちんとなければならない。すなわち学習者は、何のために活動しているのか(学習目標)、何をしなければならぬのか(学習内容)、を的確に把握して活動しなければならぬのである。従来の音楽科授業では、学習者の主体的活動を重視しながらも、実際の活動は目的意識があいまいで、学習成果が上がらない活動が多かった。

本研究で用いた自己評価カードに記載されている項目は、すべて学習内容である。各授業後の5段階評価では、授業の内容によってあるいは題材構成のどの部分かによって得点の高低があったが、題材の終了時点での自由記述には、自己評価カードの項目内容に関するものが多く、教授者の意図した学習目標や学習内容が定着したことを裏付けている。

また両授業ともグループ活動を取り入れ、グループとしての自己評価カードを用いたことによって、学習への意欲が一層高まったとともに、コミュニケーション能力や協働精神の向上が認められた。また、グループ間での相互評価カードを用いたことにより、他グループの音楽表現から受けた価値観の揺さぶりによって新たな表現の工夫が可能となったことも、大きな成果と言える。

今後の課題としては、各授業における学習者の自己評価や相互評価の得点を詳細に検討し、認知的行動・情意的行動・精神運動的行動の目標をいかに設定し、授業計画や題材構成を構想するかが研究の焦点となるだろう。(三村 真弓, 吉富 功修)

【引用・参考文献】

- 1) Regelski, Thomas A. *Principles and Problems of Music Education*, PRENTICE-HALL, INC. Englewood Cliffs, New Jersey, 1975
- 2) 三村真弓, 吉富功修, 増井知世子, 原 寛暁「学習者の自己評価と相互評価による学力向上を目指した音楽科授業計画(1)」『学部・附属学校共同研究紀要』第35号, 広島大学学部・附属学校共同研究機構, 2006, p. 191

表5 3領域の項目のヒエラルキー

領域	評価表の項目	次一時	あらわでない音楽行動
認知的行動 「わかる」	ソプラノリコーダーの運指がわかる アルトリコーダーの運指 (H, dis, fis, h)がわかる	1-1	1. 知覚する 2. 理解する
	ギターの運指 (G, B7, Em, C) がわかる	1-2	
	メトロノームを使った練習の後、メトロノームなしでも一定のテンポを覚えている	2-3	6. 比較する 7. 統合する
	表現の工夫に気づくことができる	3-3	1. 知覚する
	工夫していると思った点について、具体的に記述することができる	4-3	1. 知覚する 2. 理解する 3. 分析する
情意的行動 「感じる 楽しむ」	練習に意欲的に取り組むことができる	1-1	3. 好む 4. 楽しむ
	楽器の準備や練習を協力してスムーズに進めることができる	1-2 2-3	
	表現を楽しむ	3-3	
精神運動的行動 「できる」	ソプラノ・アルトリコーダー、ギターのパートを演奏することができる。	1-1	1. 手がかりに注意する 2. 模倣する
	B7 の箇所をスムーズに弾くことができる	1-2	5. 練習によって定着させる
	メトロノームなしでもテンポを一定に保って演奏することができる	2-3	
	まちがえずにアンサンブルを合わせる ことができる	3-3	6. 洗練する 7. 一連の手がかりと行為を調和させる 8. スピードを獲得する 10. 完成する